

弟子屈から網走へ

7月22日

昨日とはうつつかわつて今日は今にも降り出しそうな空模様。朝から洗濯物のアイロンかけに一生懸命だった。旅館を出て単調な道をバスは摩周湖オ一展望台へと向う。あれだけ色んなお祈りをしたにもかかわらず寒い風がビュンビュン吹き霧又霧で湖はおろちよつと先を歩いている友人も見えず驚いてしまった。山道をくねくね曲つて降り、又どんよりした平野をつつばしりなんだか臭いなどと思つたら硫黄山だった。とにかく臭かった。バスが山に近づくにつれて臭気は鼻をつき、山に登り出すと息もたえだえ眼はしゆんしゆん。今思い返すにあの臭い中でよくぞ“ゆで玉子”が食べられた事だ。でも玉子自身は外見よりも案外おいしかった。私の友人の指輪がここで変色した。これを見つげられた布浦先生「これは硫黄のため、硫化銀となつたからだよ。」とひと講義。

バスは屈斜路湖畔の砂湯に到着。「ここほれワンワン」とばかりに掘ると砂の中から湯がわき出るのである。無心に砂にたわむれる彼女等の姿は智恵子抄の智恵子を思わせた。池の湯をまわつて和琴半島へ。ここで私達は、はじめて道産の熊と対面した。感激だった。このあたりから「君の名は」の色彩が濃くなる。この和琴という地名も菊田一夫氏によつてつけられたそう。そこから屈斜路湖を眼下に見おろして、最大の期待をよせていた美幌峠へ。ここも、あいにくの濃霧の為、見はらしは全然きかない。ノンストップで一路網走へ。

「ワアツすごい!!」これは、網走のユースホテルで夕食の席についた時、期せずしてもれた歓声である。旅立つ前からうんと楽しみにしていたケガニが目前にそなえつけられたのだからその喜びはかなり大きいものであつたことはたしかである。旅をするとその土地によつて異なる味覚の教々を楽しむことが出来るのは、誰しも経験ずみのこと。ましてめつたに来る事の出来ない日本の北の果てに近い網走でこんな素敵なのが食べられるとあつては、はしやがずにはいられないのである。カニの方に気が魅かれてならないのだが、楽しみは先にのぼす方がよろしかろうとばかり、まず御飯の方をかたづけるところにして、さてもむろにケガニに手をのぼす。しばらくはおハシを使つて上品に食べんとして失敗した結果、これを最もうまく食べるには体裁ぶらずに両手を使つて直接口に運ぶ方が味があると悟つた。そのころにはすでに獲物は半分くらい少なくなつていたのだが…………。殻

を口で割ると柔い白い身がある。これを取り出して酢醤油にちよつとつけて口に運ぶ。この動作を夢中になつて繰返している姿を誰かがカメラにおさめている。これは後々までの思い出として夫々のアルバムの1ページを飾ることになる。網走湖に夕焼けが美しく映えて湖水は一面に紫色に変つて見えた。この風景と夕暮れの空気を故郷の両親に恋人に送つてあげたいなあ……心の中でそう思つた人は数多かつたであろう。その赤くそまつた西の空は私達に“明日も又よい天気をプレゼントしてあげましょう”と語りかけているようで……………。

網走から京都まで

短食二回生

日はすでに登り湖の上にキラキラ輝いていた。私達は朝食のキャベツのサラダと魚の罐詰をお腹一杯食べ湖へ行つた。私達を誘う様に湖は美しかつた。思わずボートに乗りバスが発する時間まで戯れていた。網走まで来てボート遊びをするとは想像もしていなかつた。バスの中でお互いの手の豆を見せ合うのも楽しいものである。9時頃バスは一夜の宿である湖を去り原生花園に向う。一面の草原の向う側にはオホーツクの海が静かであつた。群れなしあるいは散々倍々と牛馬が戯むれている姿は全く絵の中に溶け込んだ絵具の後の様である。中華料理に用いる岩ツバメの巣を見た。一瞬かぐや姫を思い出した。やがてバスは広々とした原生花園に着いた。紅色の花が一面に咲いている。“はまなす”このはまなすの花の背後に遠く知床半島がかすんでいた。海岸に降りた。オホーツクの水は想像していた様に冷たくなかつた。この穏やかな海に流氷が出来るとは思えない。土産にオホーツクの貝殻を拾つた。再び私達は車中の人となつた。海岸線に沿つて素晴らしいドライブを続け天都山に着いた。天都山からは能取湖と網走湖が見える。海か湖か判らぬ位である。その美しい湖の裾に少しばかりの部落がある。まるで砂漠の中の隊商の様に私達は湖から湖へとラクダならぬバスを走らせバスストップでは冷たいミルクをゴクンと口に含めた。

バスは天都山を下り呼人を過ぎて美幌の町に着いた。こゝで昼食を取る。ある部屋に通され早速御飯にしようとした。目の前には昨夜食べた毛ガニが大手を上げて横たわつていた。昼間からサービスがいいなあーと思ひ舌なめずりをしたとたん、他の団体が入つて来た。